

傾斜地畑作の增收技術 緑作で経済的に地力増強を図る

道立上川農業試験場畑作科長 和田順行

上川農試畑作科では、堆（たい）肥などの有機物の補給が困難で、地力低下が著しい傾斜地畑作地帯に、なるべく簡易な方法で生産力を高めようとする栽培技術体系を検討しているが、ここではアズキを主作としたライ麦間作緑肥と、牧草を輪作に取り入れる方法を紹介する。

アズキ間作ライ麦緑肥

アズキの生育後半にライ麦を間作して、秋から春にかけて畠地を被覆し、雨水や融雪水による土壤や土壤中の養肥分の流亡を防ぎ、併せて、生育したライ麦による緑肥効果をねらったものであるがライ麦間作当年のアズキは增收の傾向を示しました、翌年ライ麦鋤（すき）込み跡に栽培したバレイショの生産性を高めることができる。

ライ麦の種子や肥料代は、アズキの增收分でまかなえるからバイレショの增收した分だけ収益を高めることになるはずである。

この間作方法はアズキを播（は）種するときに、畦（うね）幅を 60 cm、株間を 20 cm にするほかは、普通の栽培方法と変わりがない。ただ、畦幅だけはアズキ単作の場合より少し広くすることが、アズキに悪い影響をあたえず、またライ麦の生育を良くするコツである。

ライ麦の間作播種は、蓄（つぼみ）のつき始めたころ（上川地方 7 月中～下旬始め）10 a 当たり種子 12 kg、肥料、ちっ素、りん酸、カリをそれぞれ 4 kg（要素量）程度を、ライ麦種子とよく混合して畦間に条播する。播種直後、最後の中耕をかねて、カルチベータをかけておくのである。ライ麦をま

くとき、肥料をやらないとアズキは減収するし、ライ麦の生育も悪い。またライ麦をあまり早くまくとアズキの生育をさまたげるし、おそすぎるとライ麦の生育が悪いので、播種時期のタイミングが大切である。

なおライ麦は冬損には強いが、秋まき小麦に準じて、根雪前に薬剤散布をしておくとよい。

また翌年緑肥としてのライ麦鋤込みは、バレイショの植えつけ 7 日くらい前に行ない、なるべくライ麦の生育期間を長くおき、生草量の増加をはかる。生草量の多いほど緑肥効果が高い。

輪作牧草の導入

豆類や根菜類の作付けにかたよった傾斜丘陵地帯では化学肥料を多用しても収量の上がらないところが多くなってきた。

このような土壤は有機物が減少して単粒化し、

第1表 アズキ（主作物）の生育収量

試験区別	成熟期 (月日)	成熟期			10a当たり収量		千粒重 (kg)
		茎長 (cm)	分枝 (本)	さや数 (個)	総重 (kg)	子実重 (kg)	
対照区	9.18	35.8	1.3	33.3	487	256	100
单作区	9.18	32.9	1.3	36.2	505	285	111
ライ麦間作区	9.18	32.9	1.3	36.2	505	285	111
							143

◎品種は宝アズキ、ライ麦間作は 7 月 17 日

第2表 ライ麦（間作物）の生育量

区別	11月6日		4月12日		5月9日		10a当	
	草丈 (cm)	草丈 (cm)	草丈 (cm)	茎数 (本)	生草重	乾草重		
宝アズキ作区	31.4	21.5	49.1	102	1,850	396		
茶殻早生間作区	33.5	22.4	50.0	103	1,900	407		

土壤中に含まれる空気量や水分のつり合いが悪くなり、雨が降ると流れやすく、少し日日照りが続くと固まって干ばつにかかりやすく、作物の根が良く伸びることができなくなっている。このような畑作には、心土耕や心土破碎などにより、物理性はある程度改善されるが、これだけで地力の回復はできない。どうしてもなんらかの方法による有機物の補給が必要となってくる。それを牧草の特性を利用し補おうというのである。

従来は麦類に牧草を混ぜんして、牧草地を作る方法もあったが、現在は経済性がなり立たない。そこでアズキ等の商品価値の高い作物に牧草の導入を試みたのであるが、その栽培(輪作)体系は、一年目アズキ(牧草中まき)、二年目牧草、三年目テンサイ、四年目バレイショの四年輪作方式である。

その要領は一年目アズキ(畦幅60cm、株間20cm普通施肥)の生育中期(7月中下旬から開花始めごろまで)に10a当たり牧草種子チモシー1.5、アカクローバ0.5、ラジノクローバ0.3kgをアズキ畠全面に散布する。機械まき(ブロードキャスター)の場合はタンカル100kgとよく混合して2回に散布すると、むらがなくまける。牧草に対する肥料は10a当たり、ちっ素4、りん酸6、カリ4kgを、種子をまく前に全面に散布しておく、肥料は粒状化成を使用すると、葉をいためる心配がない。牧草は播種後10日内外で発芽して、畦間内で徐々に生育が進み、アズキの刈り取りごろには全面に5~10cmくらいに伸びるが、アズキには支障がないばかりでなく、第1表に示すように增收の傾向を示す。

このようにして、できた草地は3年目に融雪早旱施肥を行なうと第2表に示すような収量が得られるから1番草、2番草と2回刈り取り利用して、3番草を秋(10月中旬ごろ)鋤込むのである。牧草の地上部草と、地中に発達した根により、作土は有機物が増加し、地力が改善されて、第5表および第6表に示すように、牧草跡1年目のテンサイは著しく增收し、2年目のバレイショにおいても、なお增收効果が大きい。なお問題点としては、家畜を持たない畑作地帯において、牧草の活用方法であるが、その地方の事情により、乾草、または生草で売却する方法も考えられる。

第3表 ライ麦すき込み跡地バレイショの収量

試験区分	10a当たり上着重(kg)				収量割合(%)	でんぶん価	10a当たりでんぶん重(kg)	同左割合(%)
	大	中	小	計				
対照(無すき込み)区	1,542	1,149	468	3,157	100	20.3	610	100
ライ麦すき込み区	1,800	1,589	483	3,871	123	18.6	180	111

第4表 牧草を中まきした豆類の生育収量

作物、品種	処理	茎長(cm)	さや数(個)	10a当たり子実重(kg)	収量比	千粒重(g)	精粒歩合(%)	
							対照單作区	牧草中まき区
アズキ、宝アズキ	対照單作区	35.7	30.4	216	100	136	95	
	牧草中まき区	36.9	29.5	240	111	139		97
サヤ豆、大正キントキ	対照單作区	25.9	6.9	186	100	578	91	
	牧草中まき区	27.7	7.2	195	105	587		96
ダイズ 奥原1号	対照單作区	67.1	26.5	123	100	257	44	
	牧草中まき区	60.1	26.6	140	114	262		43

◎ダイズの精粒歩合の低いのは、マメシンクイガの被害による。

第5表 豆類に中まきした牧草の収量

作物、品種	10a当たり(kg)			マメ科率(%)
	1~2番草合計	生草重	乾物重	
アズキ、宝アズキ	6,331	1,311	104	50
サヤ豆、大正キントキ	6,055	1,289	102	41
ダイズ 奥原1号	5,988	1,338	106	54
えん麦間作牧草	5,487	1,261	100	17

第6表 牧草すき込み跡地の収量(10a当たりkg)

項目別	牧草跡1年目		牧草跡2年目	
	てん菜		バレイショ	
	生根重	比	上薯重	比
対照区	3,769	100	3,137	100
牧草輪作区	5,521	141	3,631	116